

今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 資料

目黒区立みどりがおかこども園
園長 高橋 慶子

1 小学校との連携・接続の観点から

国公立幼稚園（幼稚園には幼稚園型認定こども園を含みます。以下同じ。）は、幼保小接続の推進にあたり、地域とのつながりを生かしつつ、幼児教育施設間、小学校との繋がりをつくるハブとしての役割を果たせるよう取り組んできているところですが、そのような中、現状として考える成果と課題は以下のとおりです。

<成果>

- ・架け橋プログラムの推進により、国公立幼稚園が積極的にアプローチすることで、幼保小の相互の連携意識がさらに加速している。
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や育みたい資質・能力（以下、「3つの資質・能力」という。）に対する意識が高まり、それらを念頭に多様な体験・経験や主体的な遊びを通して、幼児が満足感や達成感を味わうことを重視した実践を積み重ねる意識が一層高まってきている。
- ・幼小連携のこれまでの実績を生かしつつ、私立幼稚園や公・私立の保育所や認定こども園とも連携をもち、地域ぐるみの連携にも力を入れるようになってきている。

<課題>

- ・架け橋プログラムの認知が一部で不足しているため、その効果を十分に活用できていない状況があることから更なる取組が必要。
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について、小学校との共通理解が十分に進むことで小学校低学年の成長する姿としての認識が深まってきている。また、小学校との合同研究会等では、3つの資質・能力をベースとした研究協議は話題が共有しやすいことから、相互の参観等を通して、子どもの姿から共通理解を推進することで、接続が進んできている。一方、未だ共通理解を図るための十分な機会を確保することができないため、このような機会を多く取り入れていけるかが課題。
- ・小学校との接続には長年積極的に取り組んでいる見地から、これまで培った学びの基礎を小学校で効果的に活かすためには、情報の伝達に工夫をしたり、地域の教育機関間の垣根を低くし、より密接な連携を進めたりして、地域の教育力を高めていくことが重要である一方、同時に課題でもある。このような取組は、幼児教育から小学校教育へのスムーズな移行を支援し、子どもたちの発達に対する一貫性のある支援体系を構築することができると思う。
- ・その際、教育委員会の協力と知見も得ることができると、接続としての教育内容の改善、新たな試みを常に図ることができると考える。この体制は、教育の質を保ちながら新しい接続の在り方へ向かうベースとなり、互いの教育力が高まることにつながると考えるが、地方自治体によって教育委員会の関与の程度に差がある。

2 0歳から18歳の学びの連続性の観点から

<成果>

成長した卒園生は、自己実現を成し遂げて充実した生活を送っているという報告をくれます。これ

は改訂により3つの資質・能力を通した教育の連続性と一貫性が、子どもたちのウェルビーイングを高めることにつながることを示し、改訂の成果といえます。幼稚園で見られる教師との信頼関係のもと自己表現と友達と楽しむことのできる遊びや生活する幼児の姿は、幸福感に直結しています。この幸福感の土壌で育まれる豊かな心情や思考力、判断力、表現力、社会性、知識・技能等の基礎は、学童期の学びや遊び、探究への意欲を促し、達成感と幸福感を深めることに繋がります。各教育段階をつなぐ質の高い教育は、子どもたちの心身の成長に不可欠です。

<課題>

幼稚園では先述したウェルビーイング等を見据えて、さらに幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識し、3つの資質・能力を育むことを充実していくことが重要です。そのため、国公立幼稚園においては、毎年全国の園で、研究保育を行い、講師の先生より指導を受け、指導の改善を図るとともに、幼稚園教育要領に則った公教育を実践し、公開保育などによりそのノウハウを提供してきているところです。その過程において、参加者（特に若手教員）等から挙げられた課題は、以下のとおりです。

- ・幼稚園教育要領の中で、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が多岐にわたり、3つの資質・能力の言語化や評価などにおいても、若手教員にとっては理解しにくい。
- ・これまでも組織的に地区や自園での研究や研修を積み重ね、課題の解決に向き合っているが、保育経験の差による読み取りの幅や深さなどにも差があるため、更なる研究・研修の機会の保障が必要。
- ・幼児教育の重要性と価値を社会に広く理解してもらうために、幼稚園の実践や教育力をどのように活用するかが課題。
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と実際の幼児の姿を結び付けることが難しい。
- ・幼児の姿を評価して、3つの資質・能力として考えていくことはできるようになるが、同じ小学校に進学する幼児の経験の差に不安がある。
- ・3つの資質・能力と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が導入され、5領域との関係性についても解説には説明されているが、この3つの関係性と5領域の繋がりを理解することが難しい。
- ・5領域や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が、年齢や発達の段階における姿として、もっと具体的にするとつかみやすい。
- ・「社会に開かれた教育課程」についてどういうことなのか、実際どうなのかがわかりにくい。
- ・乳児期も含めて、乳幼児教育としての位置づけが必要な時代なのではないか。

3 幼児教育の質を高める観点から

① 環境を通して行う教育の実現の難しさと要領の解釈の幅の広さ

公立幼稚園は、幼稚園教育要領に則った公の教育を営む公的な教育施設です。自治体の教育目標や動向を意識し、幼稚園教育要領に則った教育を展開し、教育課程を編成し、指導計画を作成しています。幼児に適当な環境を与え、教師との信頼関係を基盤に幼児の発達、育ちを助長していく援助を常に振り返り省察します。そのかわりを通して心情・意欲・態度を大事にして、幼児の学びの理解を進めていきます。そうした営みを循環的におこなうのが公立幼稚園です。組織的にキャリアの幅もあり、先人の知恵や充実した保育の継承ができることも利点です。

しかしながら常に幼児教育の質を高めるためには、幼稚園教育の根幹である環境を通した教育の

充実が不可欠です。しかし、この環境の捉え方は解釈により多様です。幼児にとって、環境は多様な学びの場であり、これを物理的、社会的、感情的などいろいろな側面を含めて多角的に捉え、質の高い体験・経験ができるよう教育の実践をしています。

＜実践している環境の構成例＞

- ・遊びを作り出せる環境・・・主体的・対話的で深い学びである遊び
- ・1人ひとり、特性を生かせる環境・・・1人ひとりの特性に応じた援助、インクルーシブ教育
- ・社会と繋がることのできる環境・・・幼保小連携、地域との連携、コミュニティづくり、SDGsの取り組み、社会で守る命の教育
- ・時代に対応した環境・・・ICT活用、グローバルで多様性、科学的概念の形成、 他

これらの環境は、個別にあるのではなく、相互に絡み合っています。教師は意図的かつ計画的に、環境を構成し、幼児が自ら遊びを創造し、その中で学びを深めることができるようにしています。この過程で、教師は幼児の発達を助長する援助を行い、短期から長期にわたる指導計画においてもPDCAサイクルを適用していきます。環境の構成には保育者のねらいや意図が反映され、幼児の自主性を基にした遊びが展開されます。これについて保育者は柔軟に、臨機応変に、個々の発達ニーズに合わせて環境の再構成をします。重要なのは、幼児の主体性と教育的意図とのバランスを保つことであり、このバランスは時期や発達段階、個々の特性によって異なります。過度に指導を強調すると受動的な保育になりがちであり、逆に主体性のみを重視すると教育的価値が薄れる可能性があります。各園における幼稚園教育要領の解釈によって、多様な保育形態が生まれます。

このような状況において、教育委員会との連携は、専門的な知識と知見が得られ、教育内容の継続的な改善や新たな試みを実践する上でも有効です。教育委員会との密接な連携と相互の理解は、教育の質を高め保つためにも、地域の子どもたちのためにも大切です。

② 社会全体で幼児教育の質を高める

子どもたちの成長や発達にもっともふさわしい幼児教育が受けられるように社会全体で考えていくことがとても重要です。

幼児教育センター等が中心となって、国・公・私立を問わず幼稚園、保育所、認定こども園等が一体となって、地域全体で幼児教育力を高めている地域の実績もあります。そのような中、公立幼稚園は今後も地域の幼児教育の専門人材の育成に貢献していくとともに、研究と研修に裏付けられ、積み上げてきた実践を広く地域で活用して、地域に貢献していくことが重要と考えています。

また幼児教育センターが連携のコーディネート（保育や授業を互いに観察し理解し合える研究協議会を設定する、良好な関係構築などを推進する）のみならず、園の教育問題と一緒に取り組むことや子育て相談機能を有するなどの多様な役割の有効性に期待ができます。

地域に住まう子どもたちのために、力を合わせて幼児教育の質の向上に取り組むことを社会全体で考えていく一歩になっていくと考えます。